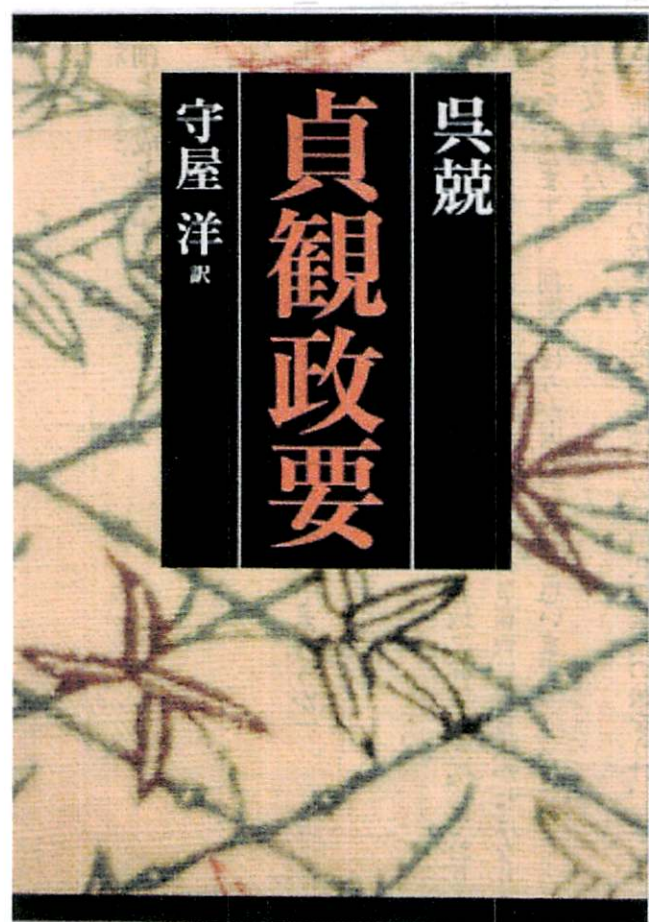




ちくま学芸文庫

43

貞観政要

呉兢 守屋洋 訳

ちくま
学芸文庫
1000



ISBN978-4-480-09695-1
C0198 ¥1000E



定価 (本体価格1000円+税)

唐代、治世の問題を真正面から取り扱い、帝王学の
指南書となった『貞観政要』。幾多の戦乱を乗り越え、
太平の世を現出させた太宗(李世民)が名臣たちと交わした問答を史家・呉兢が編集。爾来、中国
のみならず日本においても為政者たちが折に触れて
立ち返る古典の地位を得てきた。「指導者の条件」
「人材の登用」「後継者の育成」など、およそ組織運
営に関わる人間なら必ず迷い、悩んでであろう問題に
古人はどのように臨んできたのか。本書には後めども
尽きの教訓が今も満ち溢れている。本文庫は明代
の通行本(戈直本)を底本とし、全篇より七十篇を
精選・訳出。

〒105-0003 東京都港区西新橋二丁目8番1号

平野技術士事務所 代表 平野輝美

☎/FAX 03-3504-2600 携帯電話 090-3694-7864

<http://www.ce-hirano.com>

草創と守成といずれか難き

貞観十年、太宗が近所の者にたずねた。

「帝王の事業のなかで、創業と守成といずれが困難であろうか」

宰相の房玄齡が答えた。

「創業の初めにあたつては、天下麻のごとく乱れ、各地に群雄が割拠しております。

天下統一の大業を成しこげるには、それら群雄との争覇戦に勝ち抜かねばなりません。そのことを考えますと、創業のほうが困難であると思います」

魏徵が反論した。

「新しい帝王が天子の位につくためには、必ず前代の衰乱の後をうけ、ならず者どもを撃ち平らげなければなりません。人民は新しい帝王を喜び迎え、こぞつてその命令に服します。そもそも天子の位というのは、天から授かり、人民から与えられるもので、それを手にするのは困難であるとはいえませんが、しかしながら、一旦、天下を手中に収めてしまえば、気持がゆるんで、自分勝手な欲望を抑えることができなくなり、人民が平穏な生活を望んでも、賦役の止むときがありません。人民が食うや食わずの生活を送つていても、帝王の賢愚三昧のための労役が次から次へと課せられます。国家の衰退を招くのは、つねにこれが原因になっています。このような理由で、わたくしは、守成こそ困難であると申しあげたい」

太宗が言った。

「房玄齡は、むかし、わたしに従つて天下を平定し、つづきに烈難をなめ、九死に一生を得て今日あるを得た。そなたにしてみれば、創業こそ困難であると考えられるのも、もつともなことである。一方、魏徵はわたしとともに天下の安定をはかりながら、今ここで、少しでも気をゆるめれば、必ずや滅亡の道を歩むにちがいないと心配している。だから、守成こそ困難であると申したのであろう。

さて、翻つて考えれば、創業の困難はもはや過去のものとなった。今後はそなたたちとともに、心して守成の困難を乗り越えて行きたい」

(升進)

攻めか守りか 創業か守成かという太宗の問いを、もう少し一般的な角度から現代風にいかえれば、攻めか守りか、ということになる。もつとも、攻めか守りか、といつても、攻めと守りがまったく別々のものとしてあるのではない。攻めがすなわち守りであり、守りがすなわち攻めであるといった場合が、圧倒的に多いのである。将棋の大山康晴がうまいことをいっている。「わたしの将棋は守りの将棋だといわれているが、この守りというのは、アマチュアの考える守りとは全然ちがう。普通のアマチュアは、相手に攻めこまれて、どうしようもなく守りに回る。だからその時はもう手のほころひがなくなつていく。わたしの守りは、相手の攻めの先を読んで、対策を考える、そういう守りなんです。ですから、本質は守りでなく、攻めです。升田(幸三)さんは、わたしと対照的に、よく攻めの将棋だといわれているが、とんでもない、あの人の将棋の本質は、守りですよ」

守成といつても、専守防衛ではなく、攻めを含んだ守りでなければならぬということである。

貞観十年、太宗謂侍臣曰、

帝王之業、草創与守成孰難。

尚書左僕射房玄齡對曰、天地

草昧、群雄競起、攻伐乃尋、戰

勝乃定。由此言之、草創為難。

魏徵對曰、帝王之起、必承衰

亂、履彼昏政、百姓與推、四

海殞命。天授人與、乃不為難。

然既得之後、志趣驕逸、百姓

欲靜、而後役不休、百姓凋殘、

而後務不息、國之衰弊、恒由

此起。以斯而言、守成則難。

太宗曰、玄齡昔從我定天下、

備嘗艱苦、出万死而過一生、

所以見草創之難也。魏徵与我

安天下、慮生驕逸之端、必踐危

亡之地、所以見守成之難也。

今草創之難既已往矣、守成之

難當思与公等慎之。

貞観十年、太宗、侍臣に謂いて曰く、「帝王の業、

草創と守成といずれか難き」。尚書左僕射房玄齡對

えて曰く、「天地草昧にして群雄競起する。攻め

破りてすなわち降し、戦ひ勝ちてすなわち定む。こ

れに由りてこれを言へば、草創を難しとす」。魏

徵對えて曰く、「帝王の起るや、必ず衰亂を承け、

かの昏政を履し、百姓推すを樂み、四海命に帰

す。天授け、人與ふ。すなわち難しとなさず。然れ

どもすでに得るの後は、志趣驕逸す。百姓、靜か

らんと欲すれども、後役休まず。百姓凋殘すれども、

修廢息まず。國の衰弊、恒にこれに由りて起る。

これをもつてして言へば、守成すなわち難し」。太

宗曰く、「玄齡は昔われに従つて天下を定め、備に

艱苦を嘗め、万死を出でて一生に過えり。草創の難

きを見る所以なり。魏徵はわれと天下を安んず。驕

逸の端を生ぜば必ず危亡の地を踐まんことを慮る。

守成の難きを見る所以なり。今、草創の難きは、す

でに往けり。守成の難きは、まさに公等とこれを慎

まんことを思ふべし」